

東海大学体育学部教授 山下泰裕
東海大学体育学部教授 橋本敏明

司会（橋本） 平素は土曜日を開く望星講座を、本日、夕方から行う理由は、きょうは望星学塾創立者、松前重義先生の生誕の日でして、今年度から先生を偲びこの日に開講しようとして話し合ってきたわけです。

テーマについては、先生の幅広い諸活動の中から選び、その理想を引き継ぐという点に留意しました。講師として適任の方は各分野にいらっしゃるわけですが、まずは隗より始めよ、自分たちからやってみようということで、松前重義先生が国際柔道界で活動された、その足跡を振り返り、九月に、国際柔道連盟（IJF）の理事に就任した山下先生をお招きして、私ともども、お話をさせていただきたいと思っております。最初の三十分、私が松前先生のスポーツ、武道に関することを説明し、その後一時間、この分野の最大の後継者である山下先生から国際柔道連盟の役員としての仕事を引き継いだ今の心境、その思いを吐露していただきたいと思います。

武道の分野もキーワードは教育と平和

橋本 ご存じのように、松前重義先生は大変広範な社会活動をされた方です。『松前重義我が昭和史』をまとめられた白井久也さんは松前先生が活躍されたフィールドを、技術者、教育者、政治家、国際活動家 に分けて言及されていますが、私はこれらに武道家と官僚を加えました。きょうは武道家・松前重義に焦点を絞り、柔道が中心になりますが、その理念と実践について見ていきたいと思えます。

（パワーポイントを使用して説明する）

この写真は隣の木造の建物で、松前柔道塾が昭和五十一年五月に開塾したときの写真で、実際に柔道着を着られて、子供と一緒に乱取りをされているときの模様です。後ろに座っているのが、学生時代の山下先生です。

松前重義先生は柔道に熱中し、竹内三統流柔術も学ばれています。お兄さんが高名な柔道家で、お兄さんの影響も大きいと言われていています。その武道体験は社会に出てもいろいろ役に立ったと、よく言っておられました。たとえば、大学時代の徹夜実験は、柔道で鍛えた肉体と精神力のおかげであった、と。また、戦争随行反対運動のときも、柔道を一緒にやった仲間たちが、立場を超えて助けてくれたと言っておられました。

戦後、日本武道の会長も長く務められ、日本武道全体の振興に尽力されるとともに、世界柔道発展のため、七十八歳のときに国際柔道連盟会長に立候補して当選、二期八年、活動されました。

松前先生のさまざまな活動に共通することですけれども、武道の分野でも、柔道の分野でも、人材の育成を通じて、最終的には国際友情の大道を築こうという理想がありました。

それは「平和と友好を願う」という言葉に集約されると思います。

したがって、この分野の活動においても、キーワードは「教育」と「平和」であると、私は思っております。

松前先生自身が著書の中で触れておりますが、先生の精神的支柱は何だったのか。それは一言で言えば「無私の精神」、そして熊本の「もっこす精神」です。先生は自伝にこういうふうにかかれております。

「（内村鑑三先生の）武士道的精神性に通じる部分は、柔道に打ち込んできたそれまでの私の志向にも納得できるものであった。（中略）先生の一種の厳格主義や反骨の精神は、どうやら私の『もっこす』とも共通する。」

内村鑑三と松前先生の接点どこにあるのか。内村先生から松前先生がどんな影響を受けて、何を継承されたのかということが、松前重義研究には欠かせない核心部分です。少なくとも松前先生は理屈云々よりも、その姿勢、生き方、スピリットのところで非常に共鳴するものがあると言っておられるわけで、この視点は見逃せない点ではないかと、私は思っています。

松前先生の、特に戦後、一九六一年から九一年までの、武道を通じた幅広い社会活動を図式化してみました（図1）。この図に載せていませんが、念頭においておかなければいけないことは、日本対外文化協会（対文協）における国際活動です。対文協を一九六七年に立ち上げていますので、スポーツ・武道の活動とは別に、民間外交の分野で、国際活動のノウハウを十分に蓄積され、実績を上げておられました。

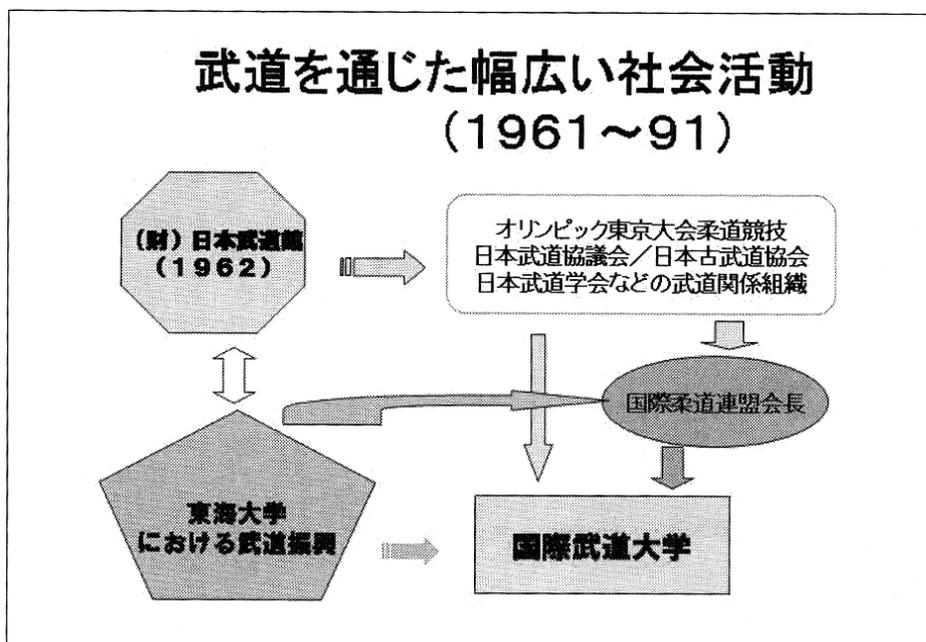


図1 松前重義先生の武道活動

武道に関する社会活動の出発点は、財団法人日本武道の設立に関与されたことにあるとい

えます。ご存じのように東京オリンピックで柔道が採用され、議員立法で日本武道館建設が図られたといういきさつがあります。このとき松前先生は衆議院議員でした。武道は軍国主義に教育に関係したということで、戦後一時期学校教育では禁止されたわけですが、日本武道館を中核として、その後武道関係団体が次々と設立されていきます。例えば日本武道協議会、日本古武道協会、学術団体の日本武道学会などです。

同時に、松前先生は東海大学において、武道を振興されています。体育部設立の翌年には武道学科をつくられました。そこで専門教育を本格的に行い、柔道部も日本一、世界一の柔道部になれということで、やがて松前先生は山下泰裕という逸材を自ら熊本でスカウトされるのです。

松前先生の武道振興というのは、ただ単にお題目を唱えるだけではなくて、実際に社会的な活動を展開するとともに、自分自身の組織の中できちんと実績を積み重ね、その中で人材を育成されている。こういったところがほかの人にはできない実行力ではないかと思っております。

日本武道における活動と、東海大学における武道振興というのは、車の両輪といえます。そして、先ほど申しましたように対文協を通じて国際活動の実績を重ねている。そういった中から国際柔道連盟会長選挙に打って出られたわけです。

国際柔道連盟会長の選挙戦を通じて、各国を回っているいろいろな人と話し合う中で、日本の柔道の指導者も、社会的常識があり、世界情勢もわかる、語学も英語やフランス語、ドイツ語などでコミュニケーションができる、そういう人材を育成することが大切で、国際交流のためにはまず人材の育成だということを、盛んに言っておられました。ですから、武道を通じて人材育成をする高等教育機関をぜひつくりたい、と。そういう考えは前からあったわけですが、具体的には松前先生が国際柔道連盟会長になられて、帰国後に、提案されました。それを日本式造館が受けて、やがて国際武道大学が創立されるわけです。松前先生はさまざまな活動を展開されましたけれども、最終的な目標は、柔道による国際友好親善の推進です。

松前先生がそもそも柔道による国際交流に真剣にかかわり始めたのは、資料によると、一九七三年六月にスイスで開催された世界柔道選手権大会を観戦されたときと思われます。

「ローザンヌに行くと町々に日本語があふれ、柔道が歓迎されている。日本の将来の歴史のために、平和な世界を建設していくために、柔道を生かさなければならない。」

このとき、日本と世界を結ぶ一つの方法といいますか、道といいますか、これだということをつぶんと感じられたのだと思います。

組織改革と普及活動に力を注ぐ

国際柔道連盟会長としての諸活動については、会長選挙時代、それから一期四年ですから、在任一期、在任二期、退任後と、四つの区分で見ると、その活動がよくわかるのでは

ないかと思えます。

松前先生が国際柔道界に蒔いた種を簡単に申し上げます。

会長選挙立候補の公約と実現については、組織改革、民主的な運営、財政基盤の確立、普及情動の奨励をかかげて、選挙戦を戦いました。それまでは会長の独断的な傾向が強かったわけですが、松前先生は会長就任後、委員会制度を確立して、特に教育普及委員会を設置し、柔道の教育普及活動に力を尽くされました。この教育普及委員会が現在、教育コーチング部門になって、この度、山下先生が理事になられたわけです。ですから、松前会長時代に創設された部門を、まさに山下先生が継承されたということが言えます。

松前先生の最大の功績としては、女子柔道を大変熱心に普及、振興され、オリンピック参加の道を開かれたということがあります。このことはいずれ実現したかもしれませんが、松前会長の強力な推進力がなければ、こんなに早くはならなかったと言われております。また、国際柔道連盟で段位認定証を発行いたしました。

それから、オリンピック運動と連動した諸活動では、特にモスクワ五輪の対応について、アメリカがボイコットを呼びかけたわけですが、国際スポーツ連盟の立場としてボイコットすべきではないという運動を、IIFが最も早く世界各国に呼びかけて展開しました。

こういった松前先生の諸活動に対して、当時の日本の柔道界はどちらかというと冷やかかでした。IJF 段位認定証については特に反対でした。モスクワ五輪への対応は、日本は対米追随ですから、いち早くアメリカの意向に反応しました。

ですから、非常に厳しい中でこういった施策を実行されたわけですが、現在、こういったものが普及活動に大変プラスになっているのではないかと、松前先生の先見性と実行力のたまものだと、私は思います。

松前先生は、「風を伺う者は種を蒔くことを得ず」（旧約聖書・伝道の書）という言葉をよく引用されました。風ばかり伺っていたら、種を蒔くことはできない。勇気と決断力をもって種を蒔いていくことが大切だと言っておられます。

山下先生は選手時代から普及活動で世界のいろいろなところを回っています。そういった体験を通して、松前先生の心を引き継いで、これからも世界の柔道場で活動をされると思います。

松前先生に声を掛けられて

山下 ただいまのお話を聞いていまして、間違いなく私も松前重義先生の教え子の一人だと、改めて実感しました。

このテーマでの講演は初めてです。

まず、私と松前重義先生の出会いですが、橋本先生が話されましたように、私が高校一年生のときに、熊本で霊峰旗高校柔道大会の第一回大会が開かれました。ここで松前先生のお姿を拝見したのが初めてです。そして大会が終わった後に松前先生から声をかけられ

て、直々の誘いを受けました。松前先生は同じ熊本県のご出身で、柔道をこよなく愛しておられました。松前先生の意向を受けて、その後いろいろな先生方からお誘いがあり、高校二年生のときに神奈川県にある東海大学付属相模高校に転校しました。以来私は、東海大学の一貫教育の中で、育てられていくわけです。

松前先生は同郷の私を、柔道で大いに期待できるということでしょうか、熱心に支援してくださいました。いろいろなことを教えてくださいました。今、振り返ってみると、「人生いかに生きるべきか。」という人生観、歴史観、あるいは価値観、こういう話が多かったような気がします。それが私の血や肉になっているところもあるなど、自分でも少し感じています。一番強く印象に残っている教えについてですが、松前先生は、私に繰り返しこんなことを言われました。

「山下君、僕が君を何で応援するかわかるか。試合で勝ってほしい、これもある。しかし、それだけじゃないんだよ。そんなことは小さなことかもしれない。僕は君に日本で生まれ育った柔道を通して、世界の多くの若人と友好親善を深めてほしい。柔道を通して、スポーツを通して、世界平和に貢献できる人間になってほしい。だから僕は君を応援するんだよ。」

松前先生がお元気なころは、頭ではわかって、実はわかっていなかった。松前先生の言葉の意味、先生の期待の重さ、これは残念ながら松前先生が亡くなられてから、だんだんと意識するようになってきました。

IJF 理事立候補のいきさつについて

...信頼回復を目指したい

話は変わりますが、国際柔道連盟教育コーチング理事立候補の要請を受けたのは、去年の十月でした。全日本柔道連盟の嘉納行光会長から直接、「君以外には考えられない、前向きに検討してくれないか」と言われました。

いつも私は思うのですが、どうも私は実際の実力よりも能力を高く評価されるようで、いろいろな役割を任されています。東海大学、全日本柔道連盟、文部科学省、JOCなどで何とか役割を全うしなければいけないと必死になって、いろいろな人の力をかりながらやっていますが、この話を聞いたとき、正直言って無理だ、どうやってそのための時間を空けることができるのかと思いました。

よくよく考えてみますと、教育コーチング理事というのは単なる理事ではないのです。教育理事とスポーツ理事と審判理事、この三理事が技術に係わる理事なのです。三人の理事がいろいろ技術的なことを提案していくわけです。それから、総会は二年に一回しか開かれませんので、理事会でいろいろなことが決まる。そう考えていくと、この理事の座を失うということは、日本にとって非常に大きなマイナスだったわけです。そのことがわかるにつれて、日本柔道の発展を考えたら、受ける以外の選択肢はないのではないかと思う

ようになりました。職場の先生方とも相談し、私はこの話を受けた次第です。受けることを決めてから、私の人生の方向が、人生のステージが変わったような気がします。

全日本柔道連盟では、山下が立てば誰も立候補しないだろう。誰も立候補しなければ、キャンペーンにお金をかけることもない。山下が受けてくれれば安心だというような雰囲気は漂っておりました。そこに外国の友人から一通のEメールが届き、こんな内容でした。「山下、ヨーロッパ、アフリカ、パンアメリカの三つの大陸連盟が協定を結んで、教育コーチング理事の座を日本から奪おうということで、一年以上前から活動している。おまえはそのことを知っているのか」

また、東海大学に来ている外国のコーチから、「本当に教育理事になるのか。大変な世界に足を突っ込んだな」と言われました。彼もそのことを知っていたのです。

日本の柔道界には国際的に活躍されている方々がたくさんおられるのに、外国のコーチが知っていることを、日本の役員の人たちは誰一人知りませんでした。そんなことがあるのかと調べたら、その話は事実でした。

ただ、いろいろ聞いてみますと、山下が立つとは思わなかったようで、向こうもびっくりしたようです。山下をつぶせば三大陸の協定は万全なものになる。国際柔道連盟には百八十七カ国が加盟しています。約百二十票を三つの大陸で持っているわけです。でも、大陸の会長が協定を結んだからといって、みんながそれになびくわけではないし、負けるリスクもある。負けたら三つの大陸の会長の権威は地に落ちるだろう。最終的には対立候補は立ちませんでした。キャンペーンの過程で私が強く感じたことは、日本は世界の柔道の発展なんてあまり考えていない。日本のことばかり考えていると、外国から見られている。彼らは、「日本は柔道にプラスになる提案があっても、すべて反対する。日本で生まれ育った柔道を少しでも変えることに対しては、どこまで反対する。」という見方をしておりました。日本と特別なつながりのない国々は、日本を信用していない。そして、本当に大事な、新しい情報が日本には入ってきていない。こういうことがわかってきました。このことは予想外の、大変な驚きでした。

私はキャンペーン活動をしながら決意しました。これから四年間、世界から信用される日本の柔道を目指して働いていこう。日本のためではない。世界の柔道の発展のために、ひたすら汗をかこう。そして日本が信頼を回復し、やはり柔道のリーダーは日本だ、と言われるようになるために全力を尽くそう。それが私のできる日本の柔道のための仕事ではないか。このような決意をしました。

プーチン大統領の柔道観に学ぶ

今年の五月、小泉総理がロシアのサンクトペテルブルグ建都三百周年の行事に参加されました。このときロシアのプーチン大統領との会談が行われました。そのことに私が多少なりとも尽力をしたものですから、その関係の記事が柔道新聞に載りました。

プーチン大統領は大の柔道愛好家です。そして、この祭典には世界の主要国すべての指導者が出席しましたが、アメリカのブッシュ大統領以外にプーチン大統領と首脳会談ができたのは、小泉総理だけです。

一月に小泉総理が訪口されたときに、いろいろな話の中で柔道の話がされ、その中で五月の祭典のときには山下も連れてくるから、柔道場で会談でもしましょう、という話をされたそうです。

しかし、なかなかこの会談は決まりませんでした。会談をやることも厳しいし、まして柔道場でやるとなると、移動が大変です。それで実際に返事が来たのは、訪口の一週間か十日ぐらい前でした。

ある日の夜、外務省から連絡がありました。ただいまロシア外務省から正式な回答が来ました。プーチン大統領が育った柔道場で会談を行うという返事です。山下さん、約束どおりロシアに同行してくれますね、と。わかりました、と言って受話器を置きました。そのときに私は、松前重義先生が非常に喜んでおられるということ強く感じました。

その会談の翌日に、NHKの小林和男解説委員がプーチン大統領をインタビューした番組がNHKで放映されました。その内容がすべて柔道のことだったのです。私は帰国してそのビデオを見てびっくりしました。

そのときのインタビュー内容の、幾つかポイントを読みます（配布資料）。

「柔道は単なるスポーツではなく、私にとっての政治哲学でもあります。世界のとらえ方、相手との関係の築き方のもとになっています。『礼』、『引き分け』...、私は柔道で使われる日本語から日本への興味をかきたてられました。」

プーチン大統領は、「柔道が私の人生を変えた」と言っています。

「私はガキ大将になるために体を鍛えました。ボクシングをしてみたり、レスリングをしてみたり、そうしていくうちに柔道にたどりついたんです。柔道との出会いは、私に転機をもたらしました。考えや人生観、人との接し方も変わりました。柔道が今の私を作ったと言えます。」

「私はどちらかといえば短気な方で、すぐに頭に血が上ってしまうタイプでした。でもそれが好ましい結果をもたらさないことを、柔道を通じて学びました。大切なことは自分の気持ちを抑えること、冷静になること、冷静になればどんな状況でも、素早く且つ適切に対応することができます。そういう教訓を私は柔道から得たのです。」

私とプーチン大統領を比べますと、柔道では大統領も強かったと思いますが、それは私のほうがはるかに強かった（笑）。だけど、どちらが柔道の神髄を学んでいるかという点、大統領のほうが私よりもはるかに学ばれていると思います。大事なことは、柔道選手として技を極めるだけではなくて、柔道で学んだことを自分の人生に生かしていくことです。松前重義先生やプーチン大統領のように自分の人生に生かしていく。これこそ講道館柔道創設者の嘉納治五郎先生が最終的に求めていたものではないか。私はそう思います。

私はビデオを何回か見た後に、頭の中で漠然としていたものがはっきりと見えてきまし

た。私自身がこれから目指すべきものが明確になってきたのです。

海外への柔道指導者派遣の目的について

資料を見ていただきたいと思います（資料1 P.12）。全日本柔道連盟の国際委員会で、海外への指導者の派遣というのは、こういうことを目的としていくべきではないかという提案をして、全員がそれに同意しました。それを受けて作成したのがこの資料です。正式に、海外へ指導者を派遣する目的として位置付けられました。

一つは、派遣先への貢献ということです。派遣先において柔道の普及・発展に努める。

これまでではどちらかという高いところから指導してやるという、上からものを見るようなこともありました。現地での指導で、大変尊敬され、素晴らしい成果を上げる方もおられましたけれども、残念ながらかえって日本に対する反発を生むこともありました。

海外への柔道指導者派遣の目的は、柔道を通して、日本の心を理解してもらい、興味を持ってもらい、細くても短くてもいいから、日本と世界を結ぶ架け橋になる。これこそが柔道指導者派遣の目的ではないか。いろいろなスポーツがありますが、世界中どこでも行われている柔道だからこそ、このようなことを成し得ることができるのではないかと思います。

マダガスカルで柔道を指導されている甲斐光という人の、「柔道の心でマダガスカルの将来を担う」という記事もあります。

世界各国を巡り、柔道を指導し続けてきた日本人が、今、国を支える基礎教育の分野に踏み込み、期待に応えようとしている。マダガスカルの小学生たちに道徳心や礼儀を学んでもらい、国の発展につなげる大切な役割です。人と人との交流である柔道を通じて、日本とマダガスカルはより深く、信頼し合う国際関係を築き上げている。

これは一つの例ですけれども、こういうことが柔道でできるのです。それを我々は目指していく。

「海外への柔道指導者派遣の目的」ということで明文化した一枚のペーパーがどんな意味を持つのか、多くの柔道人はまだ理解していないかもしれません。しかし、全柔連は、この目的に沿ってこれから活動していく。このことによって全柔連の今後の国際交流というのは、大きくかじ取りを変えた。大きな変化であると私は思っています。

IJF 教育コーチング理事としての三つの公約

次の資料（資料2 P.13）をご覧ください。

これは、九月の国際柔道連盟総会において、私がスピーチしたものです。時間は五分から七分問ぐらいのものですが、英語でしゃべったものの日本語訳です。初めての英語でのスピーチで大変疲れました。

最初に、 から までの公約のところを見ていただきたいと思います。

に関してですが、実は柔道はオリンピック種目の中でも加盟国数が三番目に多いそうです。また、メダルが多くの国々に広がっているスポーツで、ドーピングで検挙されることが極めて少ないスポーツだそうです。柔道の唯一最大の弱点は、アメリカで大変マイナーなことです。日本ではあまり評価されておりませんが、国際的にはオリンピックスポーツとして高く評価されています。

柔道が日本の心を伝えて、世界との架け橋になるためには、世界のメジャースポーツ、オリンピックスポーツであり続けることが非常に大事です。そのためには、ダイナミックで魅力的でわかりやすく、多くの人々から支持される、そんなスポーツでなければだめなのです。つまり日本の柔道だけではなく、世界の柔道でなければだめだということを私は言いたいわけです。

柔道は、日本とは異なる文化圏の人々から見て興味が持てるのだろうかという視点が残念ながらこれまでの日本柔道界にかなり欠けていたのではないかと。ですから、外から見ると、「日本のことばかり考えて、世界の柔道ということは考えない。どんなすばらしい提案でも、変えることに対して日本は反対する。」という見方になってきたのではないかと思います。

次に、 についてですが、一介のサラリーマン、大学の一教授にお金があるわけではないし、そんなに人材がいるわけでもありません。全柔連も応援すると言っていますが、財政は豊かではありません。それでどうやってやるのか。

もし、柔道が日本と世界を結ぶ架け橋になれるのであれば、そして柔道が世界の人々に対して、日本人、及び日本の文化、日本の心というものを、伝え広げることができるのであれば、なぜ日本の外務省ともしっかりと協力しないのだろうか。そう思うんです。

日口交流だけではなくて、外務省と一緒にできることはないのか。国際交流基金と協力できることはないのか。日本にあるいろいろな財団と協力してやることのできるのではないかと。さらに日本の、世界の国々が活動する民間企業と協力できるのではないかと。

今まで私は選手強化にかかりきりで、全日本柔道連盟のための金集めなんて一回もしたことがないのですが、これから世界の索道のためにそういうところと話をしながら、何とか協力しながら、十年、二十年、三十年後の日本のために、一緒に種を蒔きませんか、こういう話をしていきたいと思っています。

今から四、五年前に橋本先生から、「柔道着を着て、裸足で畳の上に立つ。正座をする。あるいは日本式の礼法を行う。これだけで日本の文化を体験したことになるよ。」と言われました。女性が裸足になるというのは、一部の国では多少エロティックなところがあって、抵抗感がある国もあるのです。でも柔道ではそんなことは関係ない。だれもためらいません。そして畳の上に立つ。正座をする。日本式の礼法を学ぶ。イスラムの国ではアラーの神以外には頭を下げません。でも柔道で礼法を行わない人はいません。

柔道着を一回着て、日本式の柔道をたった十五分、三十分やっただけで、日本の伝統文

化を体験したことになる。そこで使われている言葉はすべて日本語です。

わかりやすいという面では、日本語より英語のほうがいいんです。そして、もしかしたら畳よりも丸いマットのほうがいいかもしれません。しかし、今言った日本語とか、相手を思いやる心とか、日本式の礼法とか、柔道の基盤を維持していくために、私は体を張ってでも、命をかけてでも、基盤を変えようとする話は阻止していかねばいけないと思っています。これだけは日本のために変えてはいけない部分で、これを変えてしまったら、日本にとって柔道の持つ意味が半減どころか、もっと下がってしまうと思っています。

私が知っている情報では、韓国はこのことに十分気づいていて、テコンドーを国を挙げてオリンピック種目にしたのです。テコンドーが広まれば広まるほど、それを通して韓国という国を理解する人が増えていくわけです。

そして、今、中国は、中国武術をオリンピック種目にしようとして、動き始めています。

柔道が広がり、テコンドーが入り、オリンピック競技大会の中で、レスリングの枠はかなり狭くなりました。レスリングというのは、もともと古代ギリシャのスポーツですが、削られてきた。柔道だってばやばやしていると、もし中国武術が入ればどうなるかわからない。日本人は、柔道人も含めて、柔道の持つ意味というものをまだまだ理解していない部分があると思います。韓国も中国もこのことをよく理解しています。まずは我々柔道人が、柔道はこんなすばらしい働きができるんだということをもっともっと認識して、そしてそれを我々一人一人が実践していかねばいけないと思っています。

公約の三番目は後でじっくり見ていただきたいと思います。

人生の夢に向かって

私は大変欲張りな人間で、人生を五回か六回ぐらい生きたいと思っています。一回目の人生は、柔道選手としての人生でした。二回目の人生は、柔道指導者としての人生でした。そして今、間違いなく第二の人生から第三の人生にシフトしかけていると思います。第四、第五の人生はまだ描けていません。

そして、最後の夢だけははっきりしています。私には尊敬する偉大な方が二人おられます。一人は柔道の創始者、嘉納治五郎先生、もう一人は松前重義先生です。嘉納治五郎先生とはもちろん年代が遠いから、お会いしたことはありません。私の最後の夢は、この世での役割を終えて、上へ行くのか下へ落ちるのかわかりませんが、そのときにこの偉大なお二人とお会いすることです。

嘉納先生が、「おまえが山下か。日本の柔道は頑張ったな。よく私の精神を理解して頑張ってくれた」と、言って迎えてくださる。松前先生が、「ご苦労さん。私の見た目に狂いはなかった。期待したとおりの活躍をしてくれた」と、そう言って私を導いてくださる。これが私の人生最後の夢です。

私が目指しているものは、私の能力から見ると大き過ぎるかもしれません。でも松前先

無限 第249回 松前重義先生生誕記念 望星講座
スポーツ国際交流の夢を引き継ぐ
～国際柔道連盟（IJF）の教育コーチング理事に就任した山下泰裕氏が語る～

生がよく我々に言われました。「汝のパンを水の上に投ぜよ。多くの日の後、汝再びこれを得ん。」（旧約・伝道の書第一章）

松前先生が示されたこの精神で、二十年、三十年後の日本のために、日本の柔道を通して世界に種を蒔いていきたい。もしかしたら途中で倒れるかもしれませんが、私の後ろには若い有為な真の柔道家がたくさん育ってきています。本当に心強いです。

ですから、私が途中で倒れても、目指しているものが本物であれば、必ず次の若い人たちが私を乗り越えて、その夢に向かって頑張ってくれるのではないかと思います。

最近、非常に気に入った言葉を見つけました。

「一人では何もできない。しかし、一人から始めなければ何もできない。」

多くの人たちと力を合わせて、世界の柔道の発展のために全力を尽くしていきたいと思っています。

橋本敏明（はしもととしあき）一九四九年生まれ広島県出身。現在、東海大学体育学部武道学科教授（主任）、学校法人東海大学望星学塾副塾長、松前柔道塾副塾長。著書・「少年柔道入門」、「Jr スポーツシリーズ・柔道」（共著）ほか

山下泰裕（やましたやすひろ）一九五七年生まれ熊本県出身。東海大学大学院体育学研究科修了。全日本柔道選手権九年連続優勝、ロサンゼルス五輪無差別級金メダリスト。国民栄誉賞受賞。現在、東海大学体育学部教授、国際柔道連盟教育コーチング理事。文部科学省中央教育者議会委員。著書・論文多数

（資料1）

海外への柔道指導者派遣の目的

I 派遣先への貢献

（派遣先において柔道の普及・発展に努める）

技術向上（指導者・競技者の育成）

基盤整備（愛好者の育成、理解者の獲得）

柔道を通しての国際交流

（柔道が派遣先と日本を結ぶ架け橋となる）

単なる技術指導にとどまらず、柔道の心や柔道の

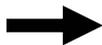
もつ教育的価値に関する適切な助言も行う

柔道関係者はもとより多くの人々と信頼関係を築く

柔道を通して広く日本の心・文化を理解してもらい、

異文化観交流を推進する

柔道の役割
派遣指導者の役割



世界と日本の
架け橋

（資料2）

IJF 総会挨拶 教育コーチング理事の公約

全日本柔道連盟の推薦を受けこの場に立てることを非常に光栄に思います。又、前任者の中村理事、本当にご苦労様でした。これまでの中村先生のご功績に心から敬意を表します。

私の公約、これからの目指すものを皆さんにお伝えし、またこれについて皆さんからのご意見、お考えをいただきたいと思えます。

オリンピックスポーツとしてダイナミックで魅力的でわかりやすく、多くの人々から支持されるスポーツであり続ける事
（いつまでもオリンピック種目としてその役割を果たしうる存在である事）

柔道を世界の多くの国々に普及させ、その技術も含めてそれぞれの国々、大陸で発展を続けるためにサポートする事。

柔道の創設者、嘉納治五郎師範が目指したものは身体を通しての人間形成である。非常に教育的評価の高いスポーツとして柔道を通して人間教育を図る事

世界の多くの柔道家の人々と協力しながら、この3つの公約を大切に、相互協力のもと、世界の国々と協力し全力を尽くしたい。